

## 計測器校正の勘どころ

校正証明書編(第5回)・ロゴ入り校正証明書の利用法

アンリツ計測器カスタムサービス株式会社  
計測テクニカルセンター  
山崎 俊雄

## 《はじめに》

校正サービスのトレーサビリティの確認には2つの方法があることをご説明させていただきました。そのひとつの方法が JCSS や A2LA のロゴ入り校正証明書を利用する手法です。では、これらの校正証明書は具体的にどのような場面で利用されているのでしょうか。今回はこの点について考察してみたいと思います。

## 1. 校正のトレーサビリティと校正証明書

過去の小欄(歴史編:第1回)では世界的な市場統合の趨勢の中で、計測器の校正と計測のトレーサビリティを確保することが必要になったことをご説明いたしました。また、国際規格に基づく校正機関の認定が進んだこと(歴史編:第3回)をご紹介いたしました。

1990年代前半、このとき既に国際規格では「校正」にトレーサビリティが必要であることは明確に定義されていました。しかし、当時の日本国内において、これを明確に証明できる手段はまだ存在していませんでした。折しも ISO9001 が産業界に急速に浸透しつつあり、日本でもトレーサビリティが確実に保証された校正証明書の需要が高まることとなります。

## 2. JCSS/A2LA のロゴ入り校正証明書とは

そこで、実際に「トレーサビリティの見える化」を促進する目的で新たに設立されたのが JCSS (Japan Calibration Service System) という校正機関の認定スキームです。JCSS の認定を受けるためには、校正機関は校正のトレーサビリティが確実に国家計量標準につながっているということを証明しなければなりません。立入検査では国家計量標準につながる校正の連鎖を、校正証明書を遡りながら一つひとつ審査します。こうして確認されたトレーサビリティ体系の下で実施された校正には、その校正証明書に識別のための特別な「ロゴマーク」が付与されることとなります。

同様に米国には A2LA (American Association for Laboratory Accreditation) という校正機関の認定制度が存在しており、個別の「ロゴマーク」でトレーサビリティの確保を識別できる仕組みが確立しています。

## 3. どのような場面で利用されるのか

さて、これらのロゴ入り校正証明書は実際にどのような場面で利用されるのでしょうか。当初の目的の一つである ISO9001 審査における計測器の校正トレーサビリティの証明としての利用が真っ先に挙げられるでしょう。実際に ISO9001 品質システムの審査の場面では、計測器の国家計量標準へのトレーサビリティの確認は「(JCSS/A2LA などの)ロゴ入り校正証明書が確認されるまで遡ること」が推奨されています。

また、昨今では世界的な市場統一の中で品質水準の高度化が加速しており、これに対応するために自社の保有計測器に対して国際規格(ISO/IEC17025)に適合した校正証明書の入手を課して標準化するケースが増加しています。実際に国際規格に適合している JCSS や A2LA のロゴ入り校正証明書は、このような場面で非常に大きな効力を発揮することとなります。

## 4. ロゴ入り校正証明書の限界

このようにロゴ入り校正証明書は大変有用である一方、校正機関は厳しい認定審査基準をクリアしなければならないという問題があります。校正については技術的に未確定の分野も数多くあり、現在行われている全ての校正証明書をロゴ入り校正証明書に転換することはまだ困難が多いというのが現状であります。

当面は市場において校正証明書とロゴ入り校正証明書が混在する状態が続くものと思われそうですが、トレーサビリティ意識の高まりから、今後はロゴ入り校正証明書の要求が増加するものと予想されています。

\*: マネジメントシステムのための計量計測トレーサビリティ講演会(2013年12月16日)日本橋公会堂ホール、NITE/JEMIC/JQA 計量計測部門 共催

## チェック!

計測器の校正におけるトレーサビリティの確認は品質維持の大きな関心事となっています。JCSS/A2LA のロゴ入り校正証明書はトレーサビリティが確立していることを見つけて識別することができ、大変有用です。